

令和7年度 児童・生徒質問調査結果の概要と分析

・現状 ○要因 ◎対策

1 主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善に関する取組状況

(1) 授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいましたか（質問小中32）

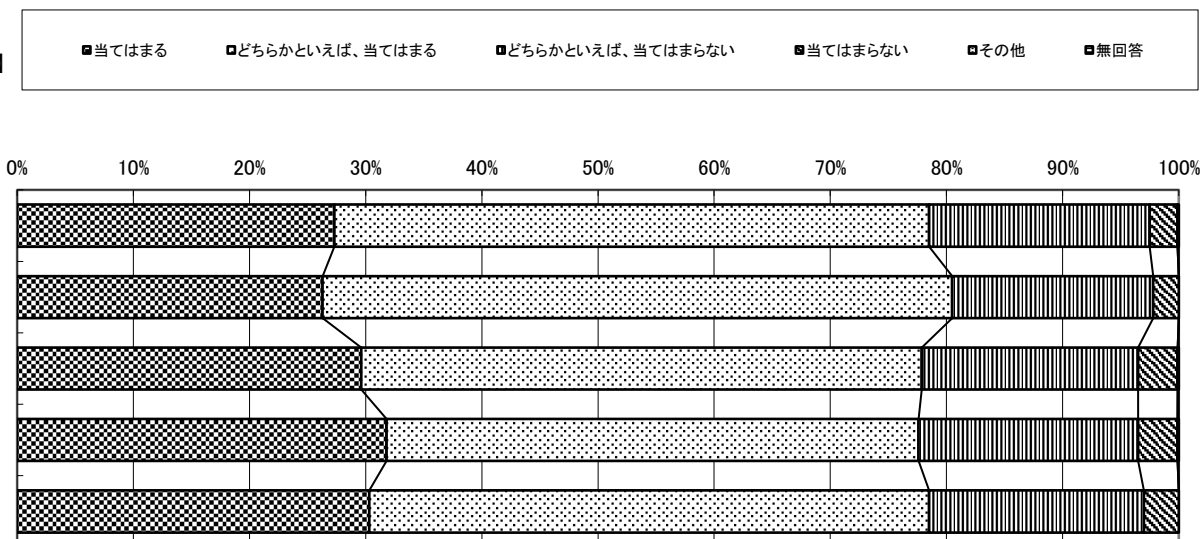
・「当てはまる」「どちらかといえば、当てはまる」と回答した児童生徒の割合は、過去5年間、小学校では同程度、中学校では減少傾向にある。

・肯定的に回答している児童生徒ほど、各教科の正答率やスコアが高い。

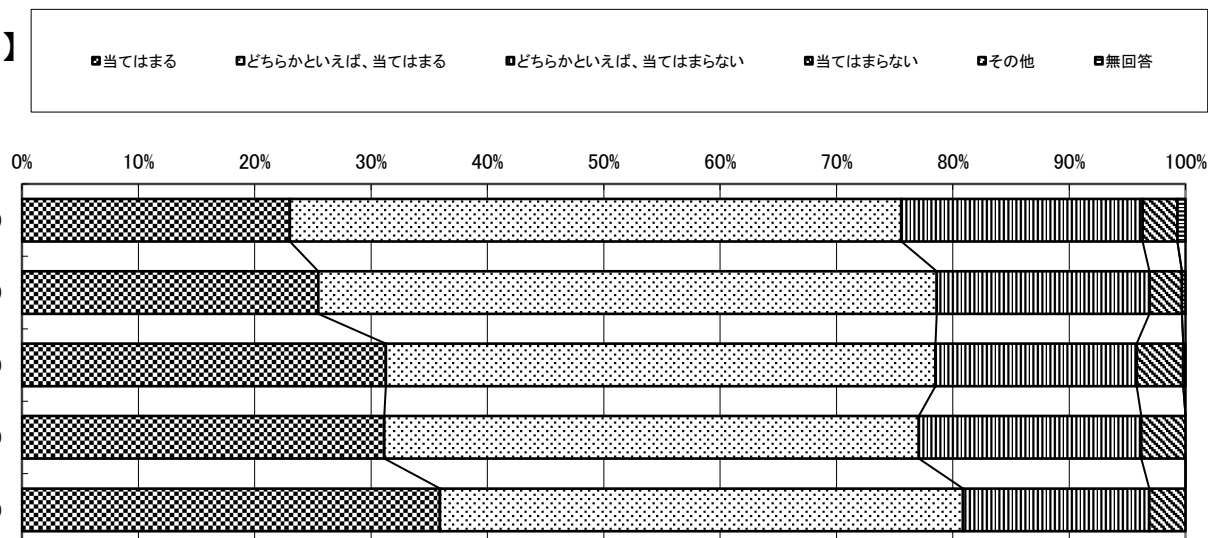
○課題の解決に向けて、自分で考えているものの、自らの学びを自覚しながら主体的に取り組むことができていないと考えられる。

◎児童生徒の学びが主体的なものとなるためには、興味・関心を基に課題をもたせたり、活動の見通しをもつ場を設定したりするなど、学ぶ意欲の向上に努めることが大切である。

【小学校】



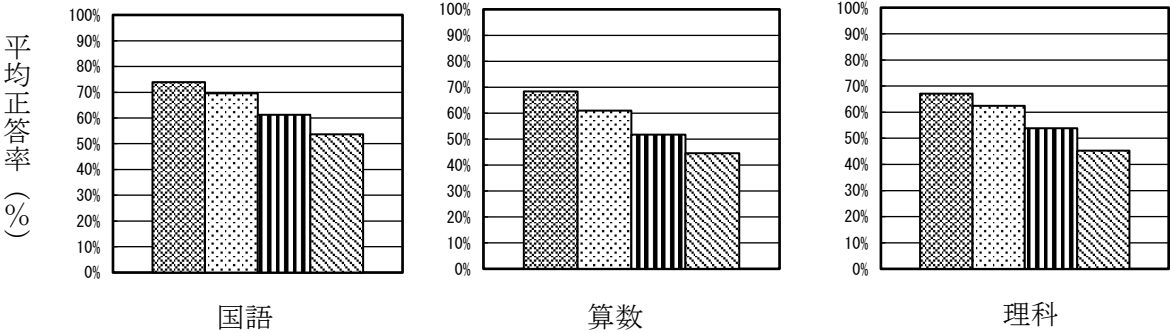
【中学校】



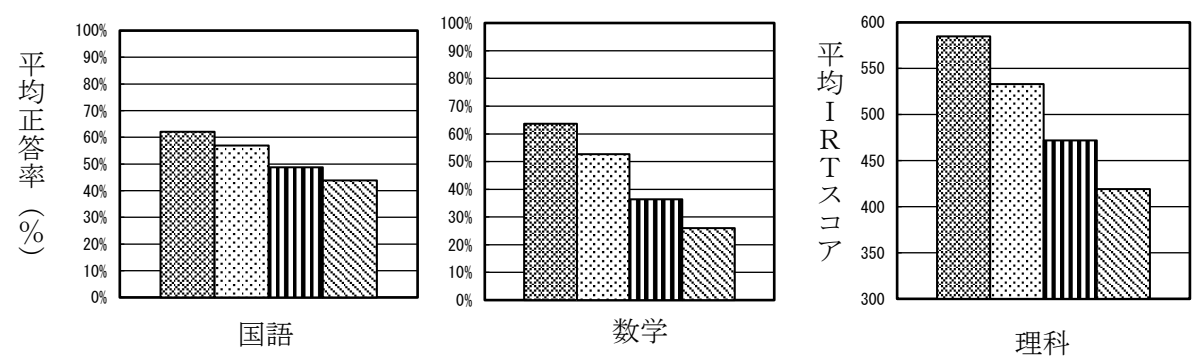
質問小中 32（授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいましたか）と各教科の正答率とのクロス集計

■1. 当てはまる	■2. どちらかといえば、当てはまる	■3. どちらかといえば、当てはまらない	■4. 当てはまらない
-----------	--------------------	----------------------	-------------

【小学校】



【中学校】

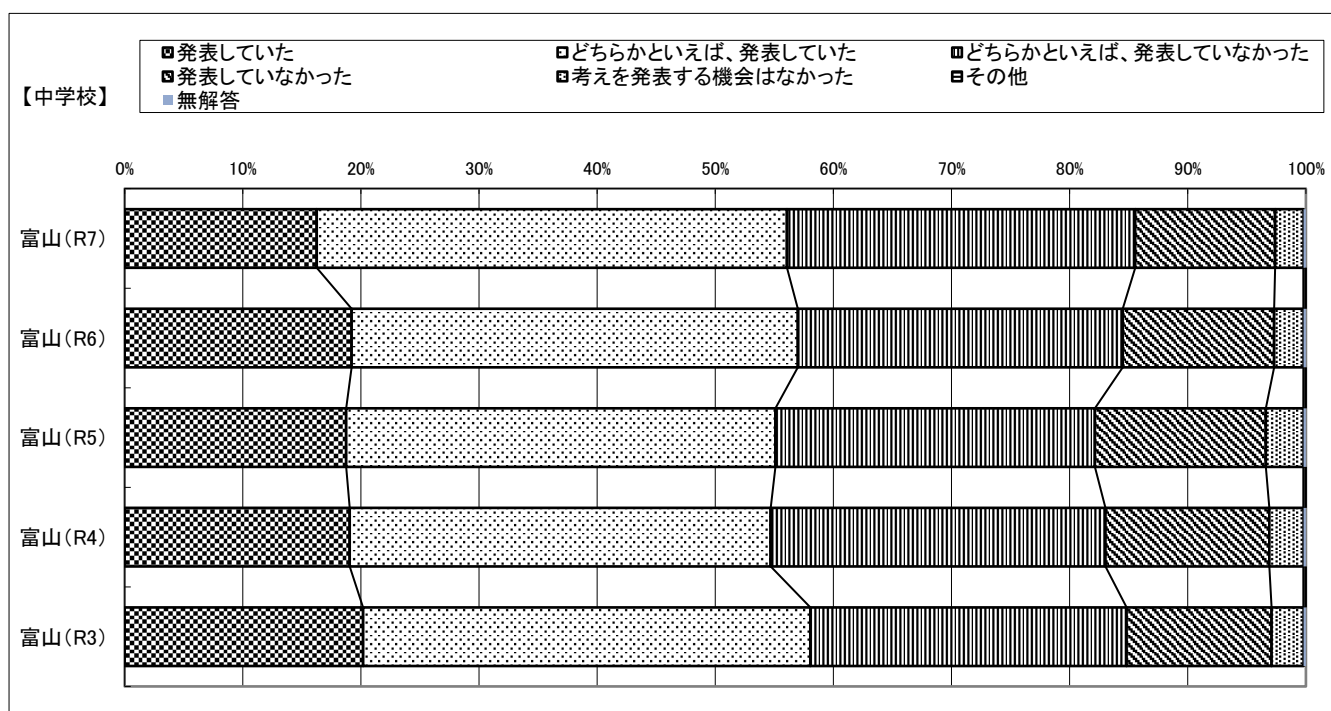
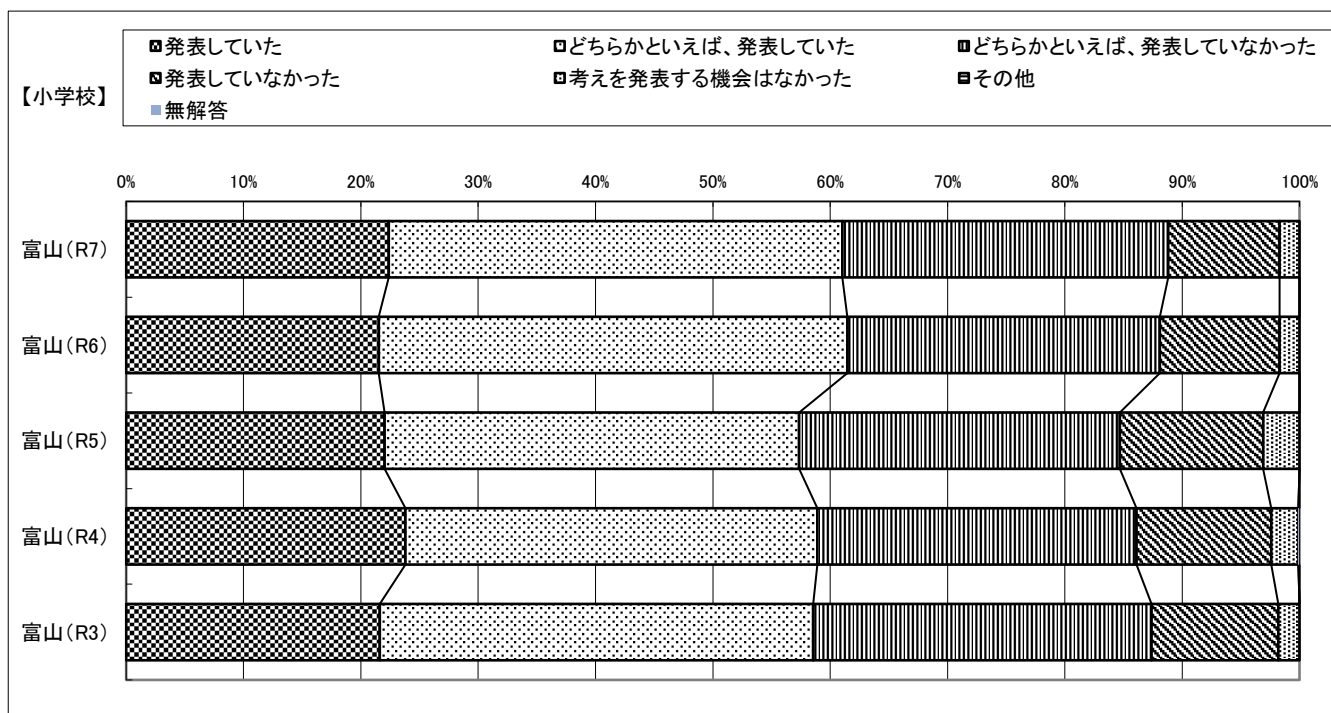


(2) 5年生までに受けた授業で、自分の考えを発表する機会では、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組立てなどを工夫して発表していましたか（質問小中 31）

・「発表していた」「どちらかといえば、発表していた」と回答した児童生徒の割合は、過去5年間、小・中学校とも、大きな変化はない。

○各校で、発表の機会を積極的に設けるなど、継続的な取組がなされているものの、複数の資料を関連付けて読み、考えたことやその理由を表すために必要な事柄を取り上げることなどができていないと考えられる。

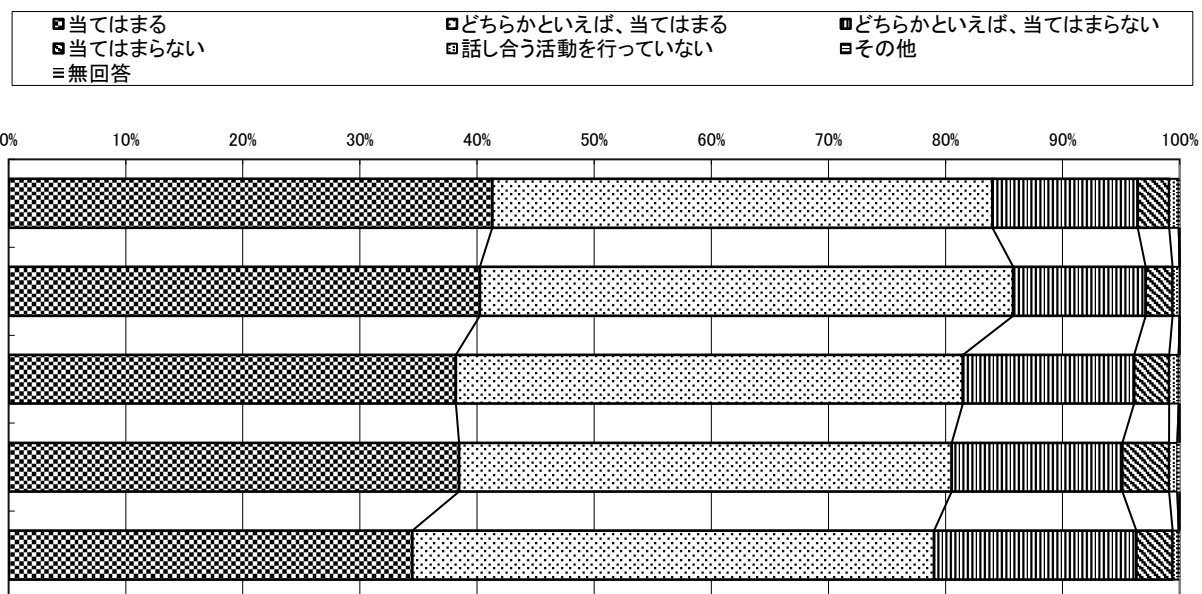
◎自分の考えをうまく伝えるようにするためには、聞き手の立場に立って考える必要がある。その際には、目的や意図に応じた資料の提示や、適切な文章の構成、展開等について、友達と話し合っ
て検討した上で、自分の考えを整理して発表する場をあらゆる教科で設定していくことなどが大切である。



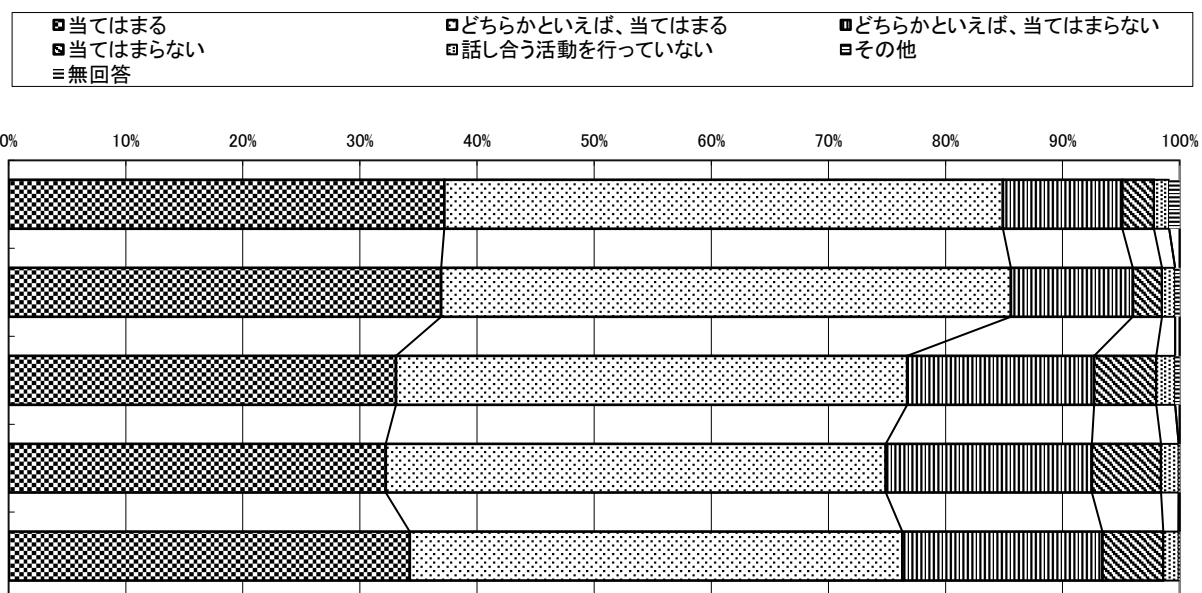
(3) 学級の友達（生徒）との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、新たな考え方に気付いたりすることができていますか（質問小中 35）（下線部「広げたりすることができていますか」～R5）

- ・「当てはまる」「どちらかといえば、当てはまる」と回答した児童生徒の割合は、過去5年間、小・中学校ともに増加傾向にある。
- 自分の考えをもち、その考えを友達と共有するなどの協働的な学びを取り入れた授業が大切にされていると考えられる。
- ◎自分の考えを深めたり、新しい考えに気付いたりできるよう、自分の考えと友達の考えを比較し、異同を的確に捉えるための視点を提示することが大切である。

【小学校】



【中学校】

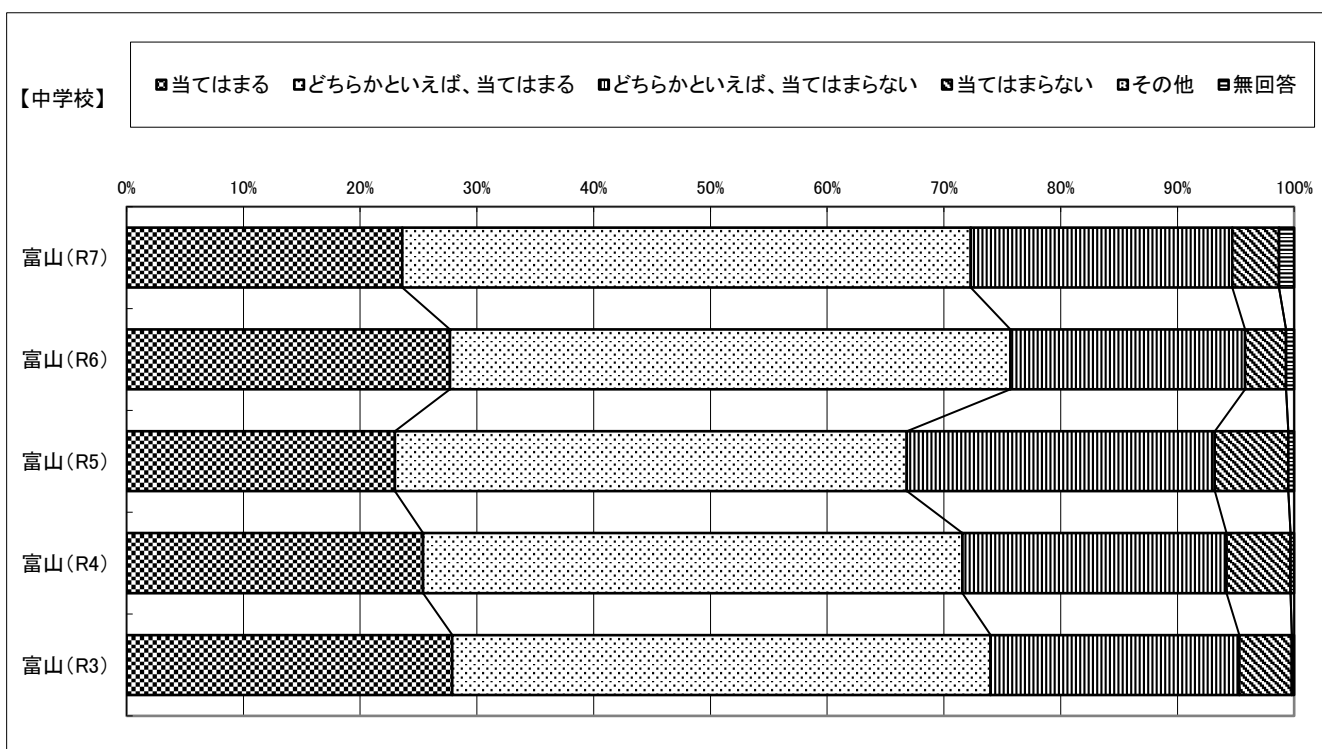
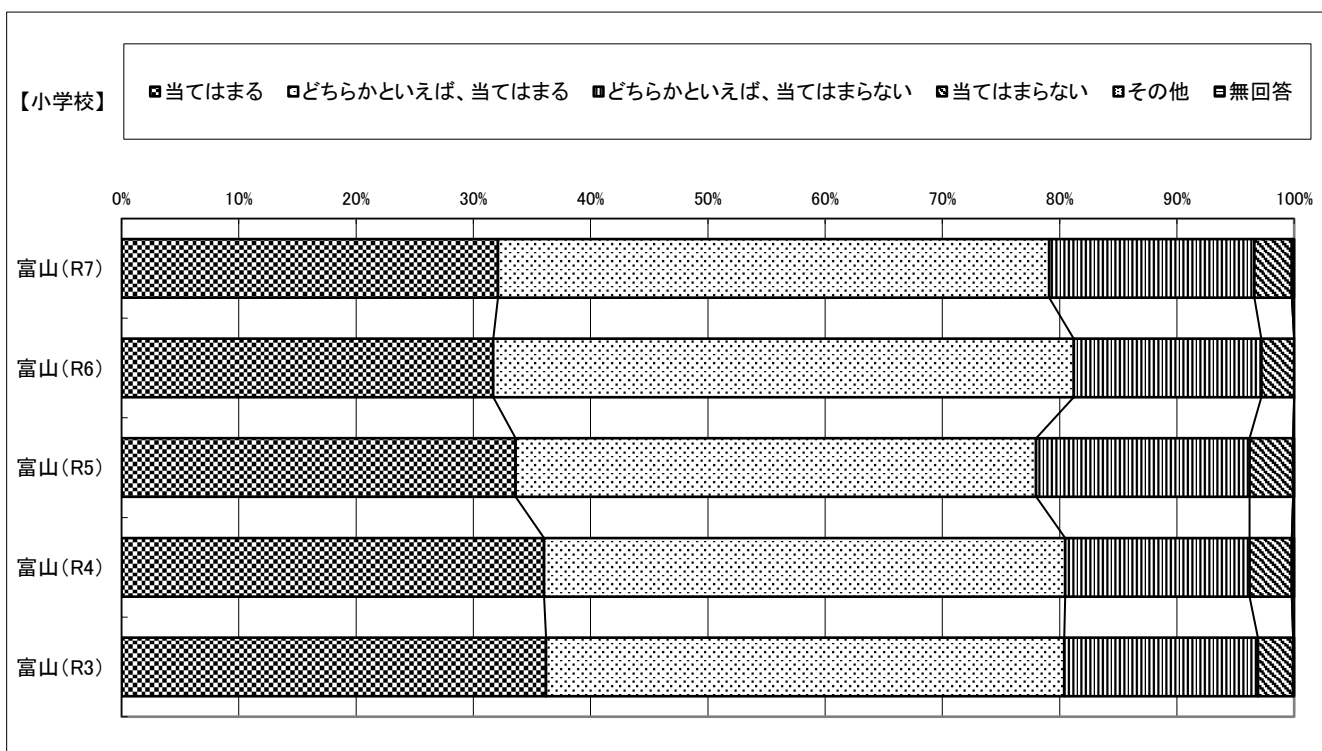


(4) 学習した内容について、分かった点や、よく分からなかった点を見直し、次の学習につなげることができていますか（質問小中 36）

・「当てはまる」「どちらかといえば、当てはまる」と回答した児童生徒の割合は、過去5年間、小学校では約8割、中学校では約7割程度である。

○児童生徒が自身の学びを見つめ、振り返る機会を設けるなど、授業改善に取り組んでいると考えられる。

◎分かった点や分からなかった点を見直し、次の学習につなげるためには、まとめと振り返りが重要である。特に、授業の終末には振り返りの観点を示すことで、児童生徒自身に成長と変容の自覚を促し、学習意欲の持続につなげることが大切である。



(5) 授業で学んだことを、次の学習や実生活に結びつけて考えたり、生かしたりすることができると思いますか（質問小中 37）（下線部「ほかの学習で生かしていますか」 R5）

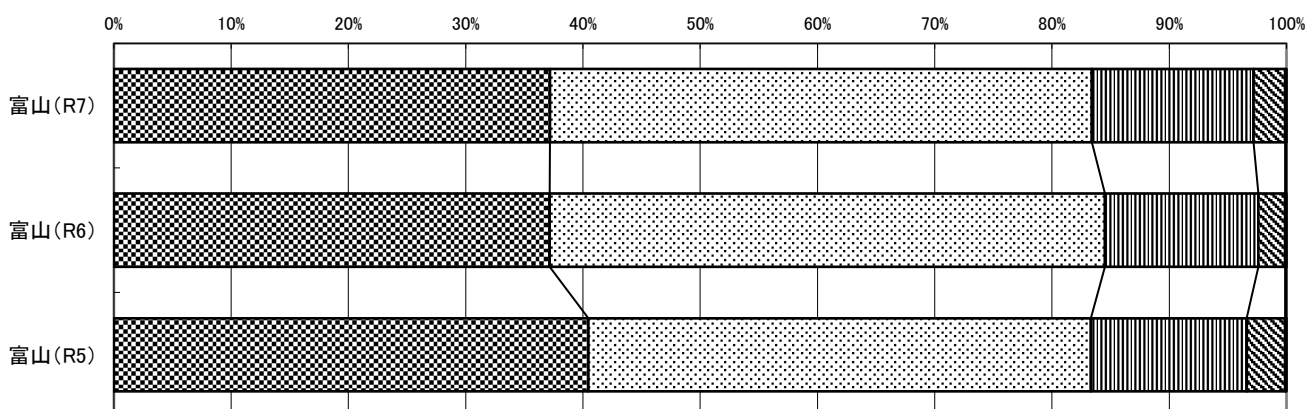
・「当てはまる」「どちらかといえば、当てはまる」と回答した児童生徒の割合は、過去3年間、小・中学校とも、約8割程度である。

○日常生活と関連した問題（課題）提示を工夫したり、連続性のある単元構想を立てたりすることができていると考えられる。

◎何のために学ぶのかを自覚できるようにするためには、切実感のある学習課題を設定したり、学んだことを他の教科や生活につなげて考える授業展開を工夫したりすることが大切である。

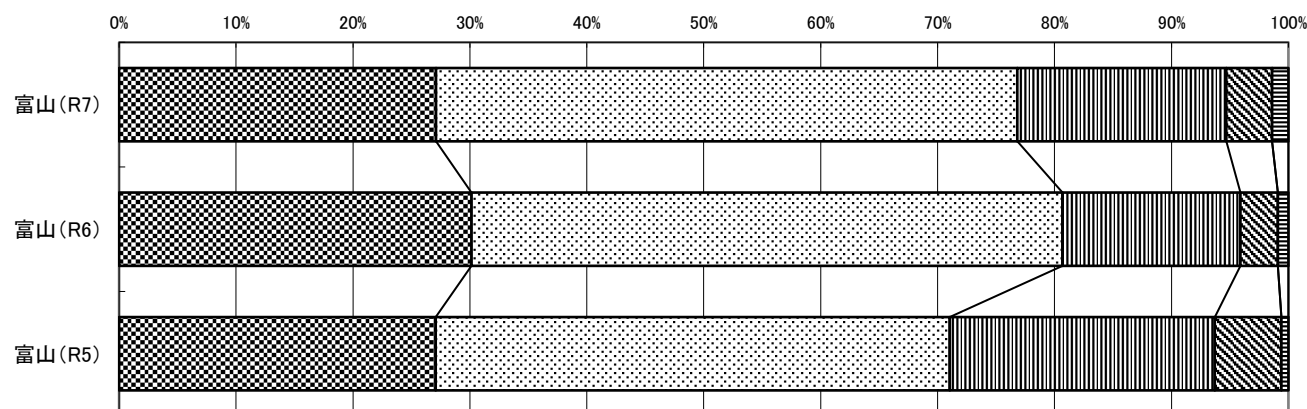
【小学校】

■当てはまる ■どちらかといえば、当てはまる ■どちらかといえば、当てはまらない ■当てはまらない ■その他 ■無回答



【中学校】

■当てはまる ■どちらかといえば、当てはまる ■どちらかといえば、当てはまらない ■当てはまらない ■その他 ■無回答

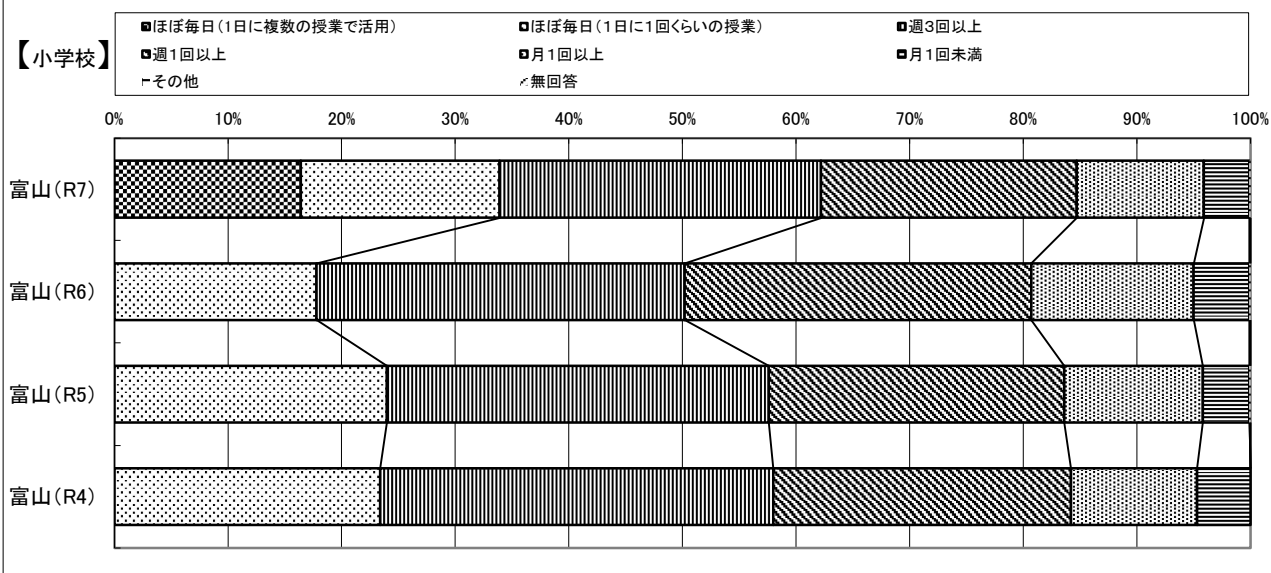


2 ICTを活用した学習状況

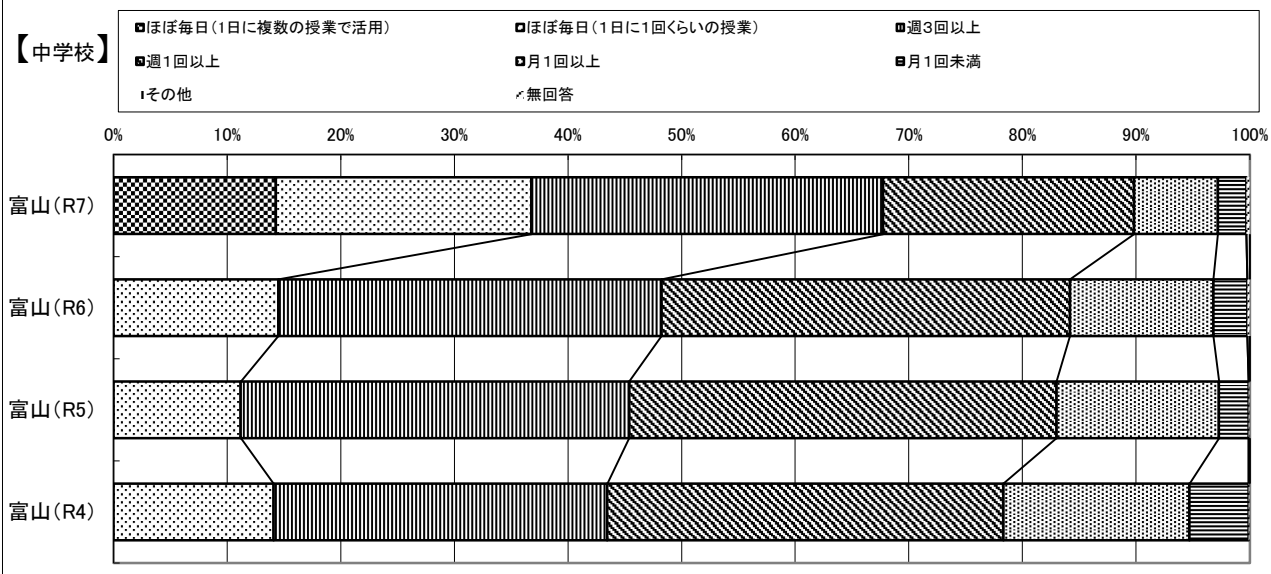
(1) 前年度までに受けた授業で、PC・タブレットなどのICT機器を、どの程度使用しましたか
(質問小中 28)

- ・ICT機器の使用頻度が、「ほぼ毎日」「週3回以上」と回答した児童生徒の割合は、過去4年間、小学校ではやや増加、中学校では大きく増加している。
 - ・児童生徒のICT機器の使用頻度と各教科の正答率・スコアとの間には一定の関係があり、ICT機器を活用することができると考えている児童生徒ほど、各教科の正答率・スコアは高い傾向がみられる。
- 学校質問調査の「ICT機器をどの程度活用したか」(小中58)も増加傾向にあり、学校・児童生徒ともに、授業におけるICT機器の使用についての必要性が高まり、意識付けられていると考えられる。
- ◎主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を進めるためには、日常的にPC・タブレット端末を使用していく段階から、今後はICT機器の特性や強みを生かした学習ツールの一つとして取り扱っていくことが求められる。

【小学校】



【中学校】



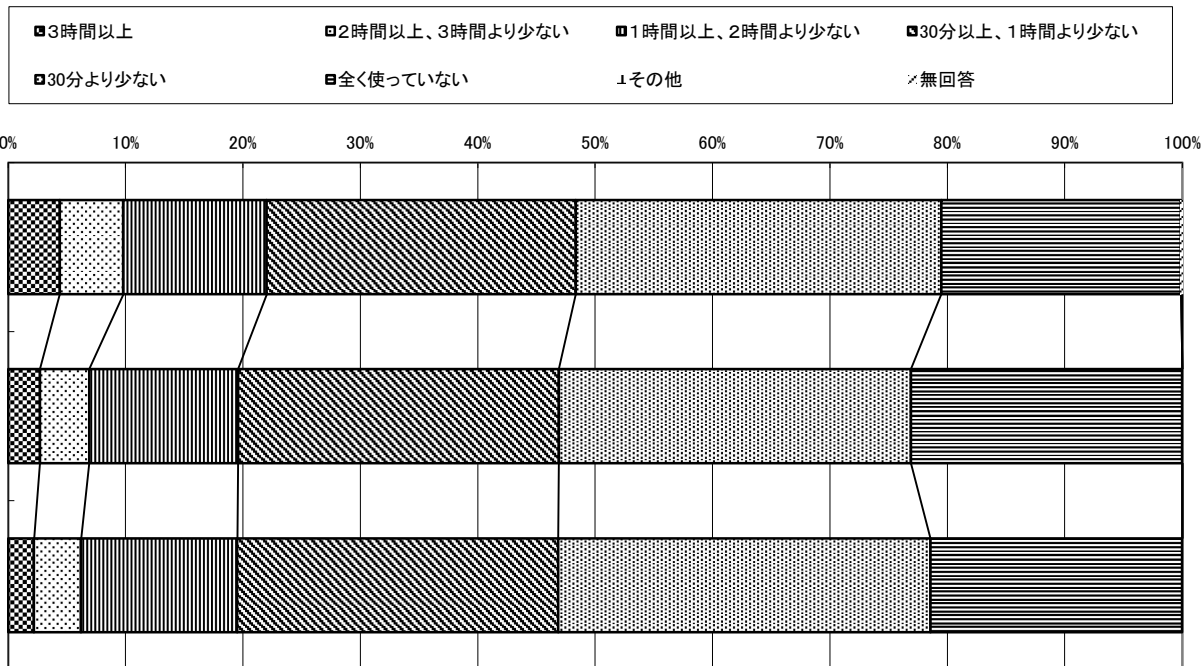
(2) 学校の授業時間以外に普段（月曜日から金曜日）、1日当たりどれくらいの時間、PC・タブレットなどのICT機器を、勉強のために使っていますか（遊びなどの目的に使う時間は除く）（質問小中18）

・学校の授業時間以外に、ICT機器を使用している児童生徒の割合は、過去3年間、小・中学校とも大きな変化はない。

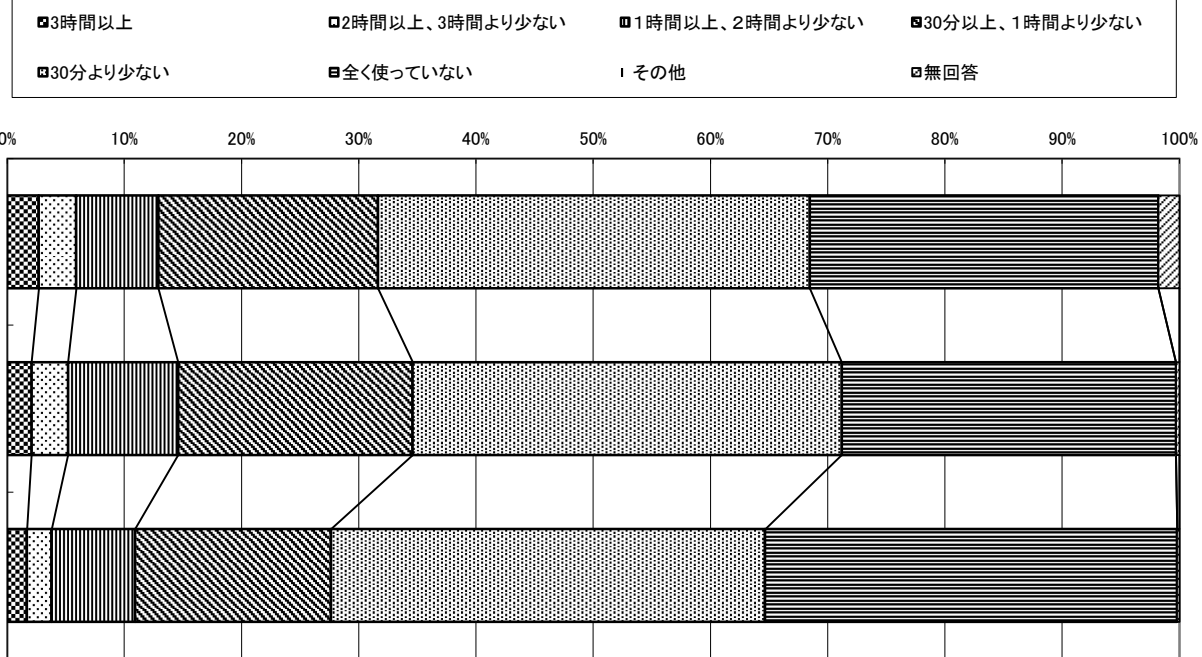
○ICT機器以外の学習ツールで、家庭学習等に取り組んでいると考えられる。

◎家庭学習を効果的に進めていくためには、ICT機器を活用することのよさを見極めた上で、学習計画・学び方の指導をより充実させていく必要がある。

【小学校】

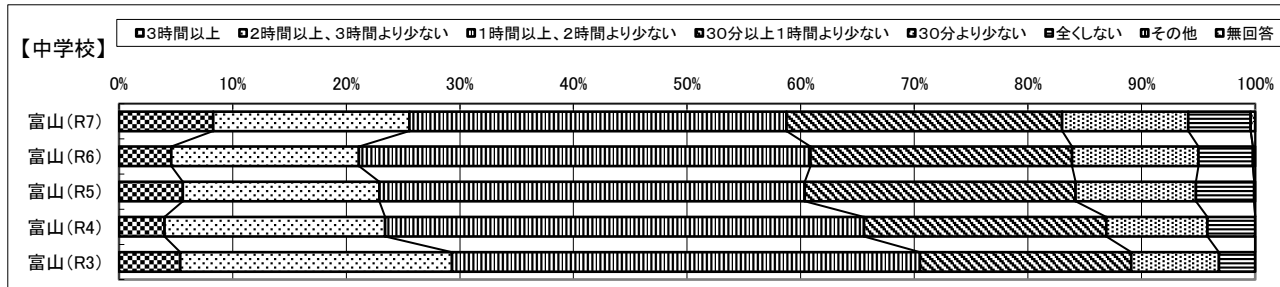
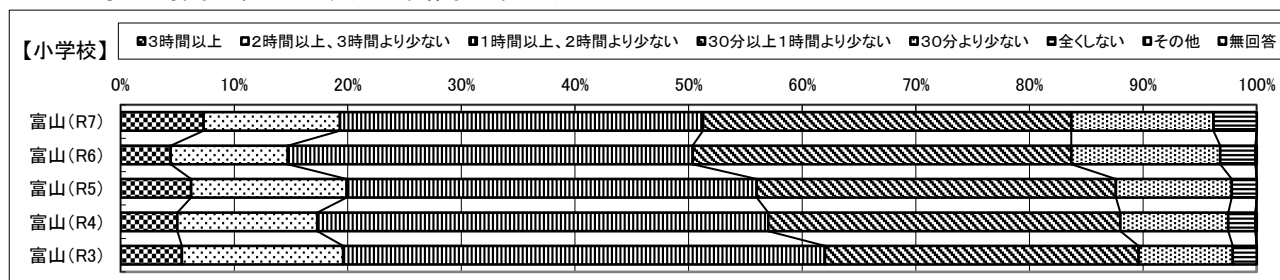


【中学校】

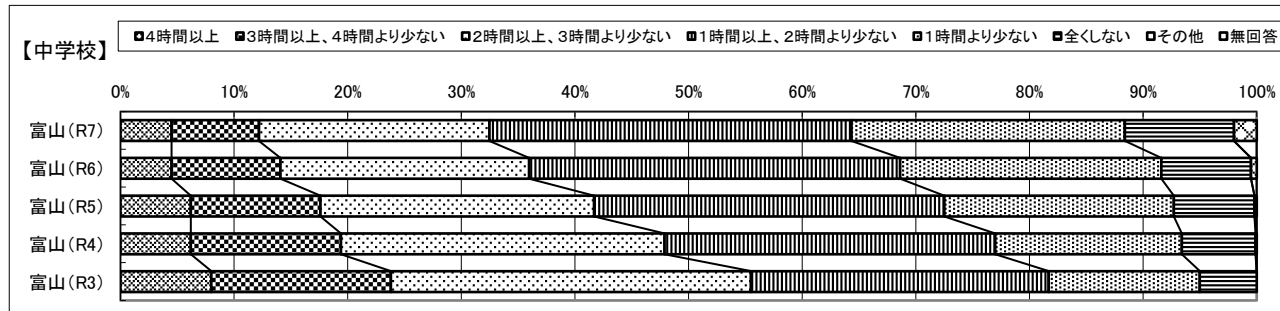
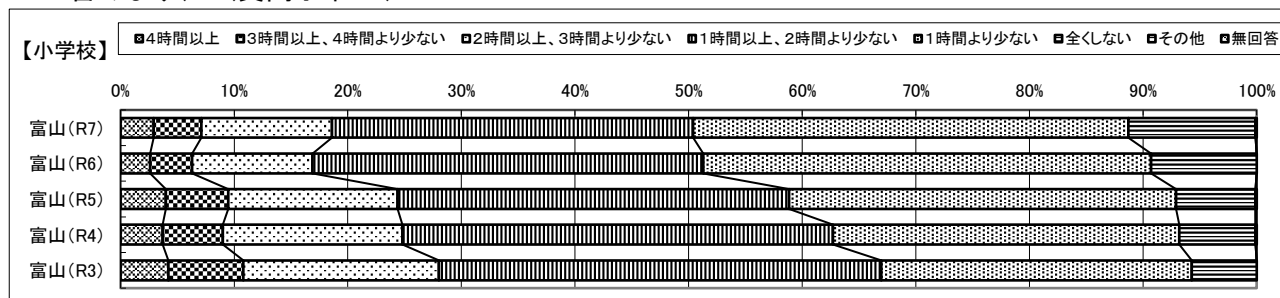


3 学習習慣、基本的な生活習慣等

- (1) 学校の授業時間以外に、普段（月曜日から金曜日）、1日当たりどれくらいの時間、勉強をしますか（学習塾で勉強している時間や家庭教師の先生に教わっている時間、インターネットを活用して学ぶ時間も含まれます）（質問小中 17）



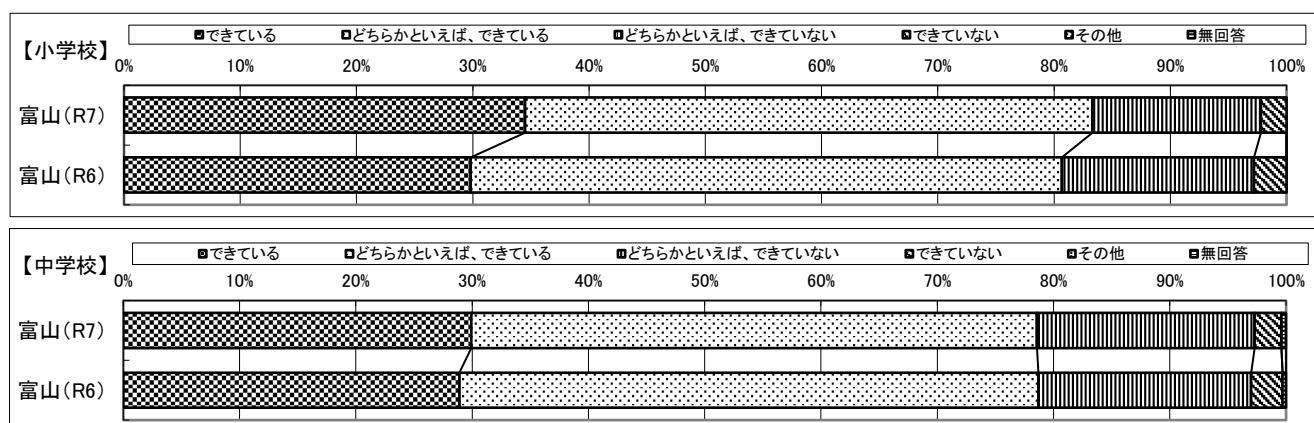
- (2) 土曜日や日曜日など学校が休みの日に、1日当たりどれくらいの時間、勉強をしますか（学習塾で勉強している時間や家庭教師の先生に教わっている時間、インターネットを活用して学ぶ時間も含まれます）（質問小中 19）



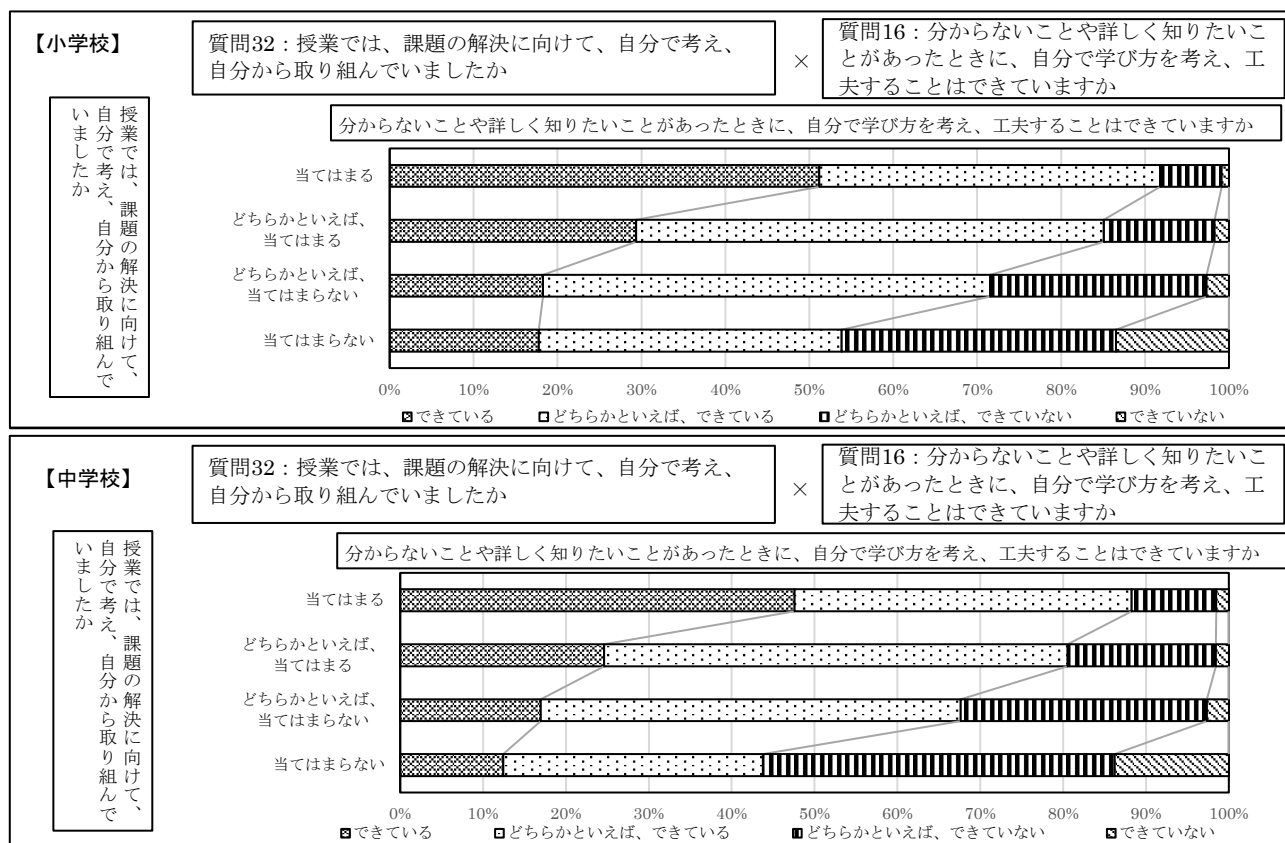
- ・平日や休日の家庭学習の時間が「1時間以上」と回答した児童生徒の割合は、過去5年間、小・中学校とも減少傾向にある。
 - ・文部科学省によると、保護者と勉強について話をしている児童生徒の方が、勉強時間が長い傾向があり、児童生徒の学習習慣は、家庭と学校が一緒に形成しているものと考えている。
- 児童生徒によって、家庭での過ごし方に違いがあり、家庭学習以外に時間が多く使われていることが考えられる。
- ◎家庭学習の充実を図るためには、学校が家庭と連携しながら、家庭学習の内容と質を高める必要がある。また、家庭での生活や学習について保護者と一緒に考えることができるよう、保護者用リーフレット「家庭学習のすすめ」「学校、家庭、地域で育てよう とやまっ子！」等の活用を促すことも大切である。

(3) 分からないことや詳しく知りたいことがあったときに、自分で学び方を考え、工夫することはできていますか（質問小中 16）

- ・「できている」「どちらかといえば、できている」と回答した児童生徒の割合は、令和6年度と比べて、小学校ではやや増加、中学校では同程度である。
 - ・授業で、課題の解決に向けて自分から取り組んでいる児童生徒ほど、「自分で学び方を考え、工夫することができている」と考えている傾向がある。
- とやま型学力向上プログラム（Ⅲ期）を踏まえた授業改善の視点である、「自己調整しながら学習を進めることができるようにする」ことを意識して授業を行っていることが考えられる。
- ◎自立した学習者の育成に向けた取組を進めるためには、自ら思考し、判断・表現する機会を充実したり、児童生徒一人一人の学習進度や興味・関心等に応じて教材や学ぶ方法等を選択できる環境を整えたりする必要がある。また、自分で考え自分から取り組むという主体的な学びが更に深まるよう、学び方を考えたり工夫したりする学習方法についての指導の充実を図ることも大切である。



質問小中 32（授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいましたか）と質問小中 16（分からないことや詳しく知りたいことがあったときに、自分で学び方を考え、工夫することはできていますか）のクロス集計



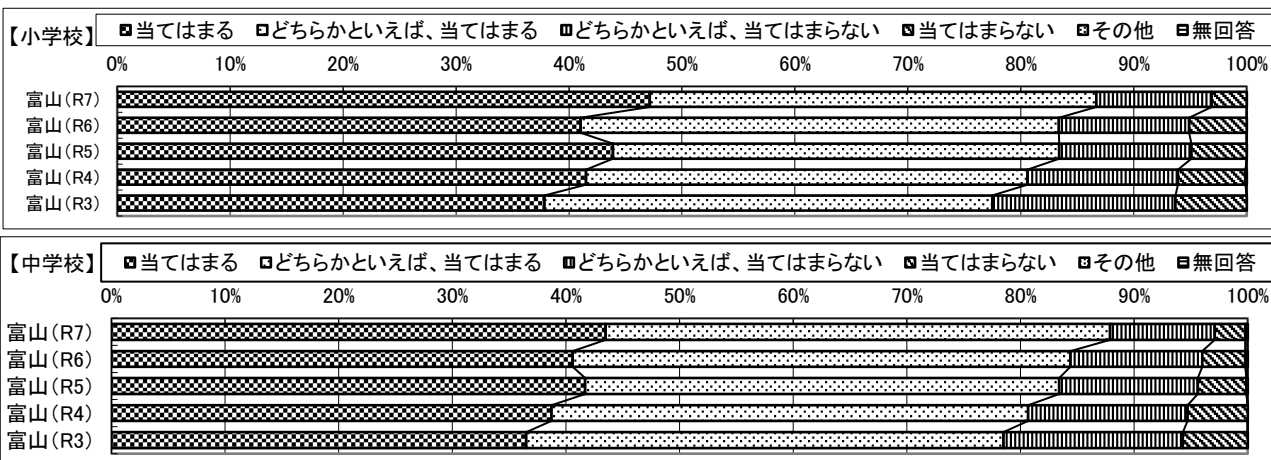
4 挑戦心、達成感、規範意識、自己有用感

(1) 自分には、よいところがあると思いますか（質問小中5）

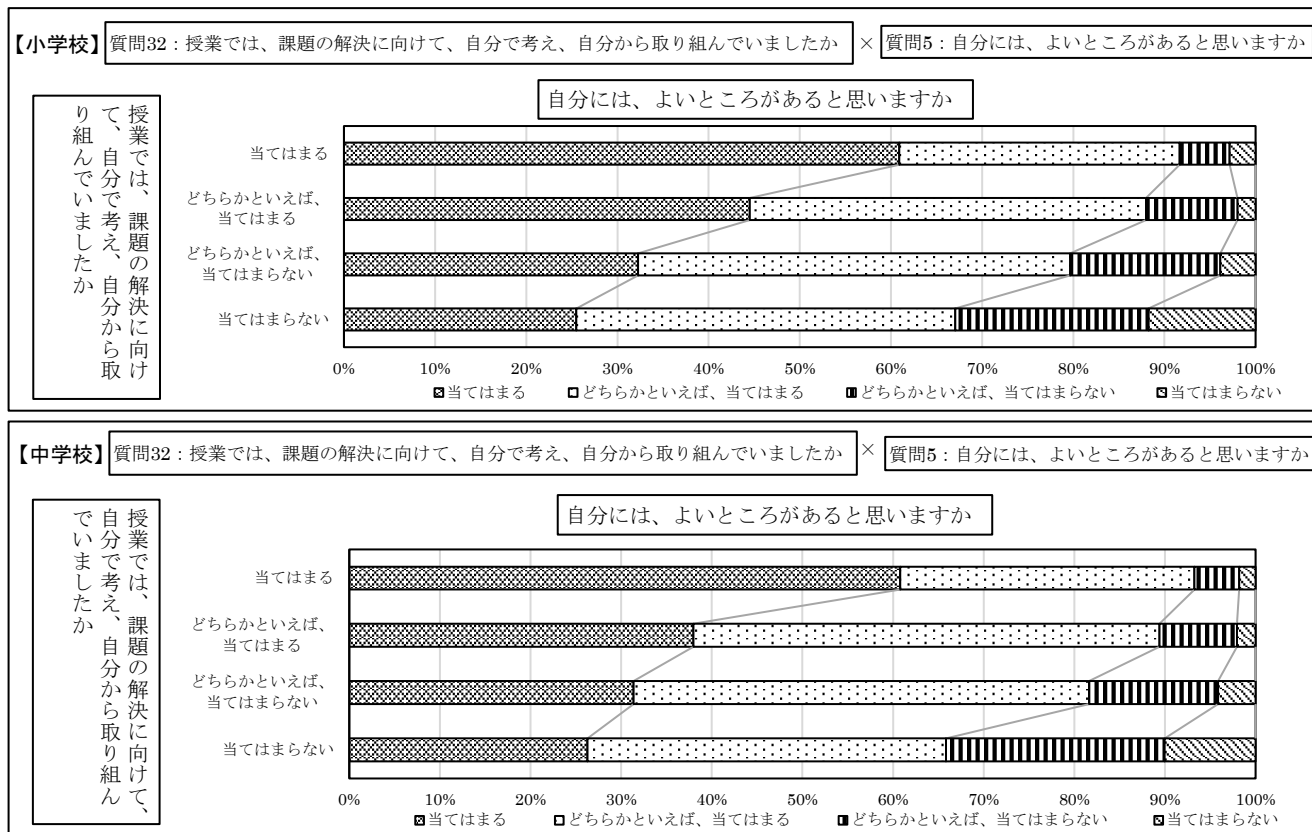
- ・「当てはまる」「どちらかといえば、当てはまる」と回答した児童生徒の割合は、過去5年間、小・中学校とも増加傾向にある。
- ・「課題の解決に向けて、自分から取り組んだ」と「自分には、よいところがあると思う」のクロス集計において、両者には相関関係があり、主体的、対話的で深い学びが児童生徒のウェルビーイングに影響を与えている可能性があると考えられる。

○質問（小中6）「先生はあなたのよいところを認めてくれていると思いますか」に対しても、「当てはまる」「どちらかといえば、当てはまる」と回答した児童生徒の割合は、増加傾向にある。教師による肯定的な評価によって、自己を肯定的に認めることができるようになったのではないかと考えられる。

○児童生徒自身が有意義で充実した学校生活を送るためには、よりよい人間関係を構築し、自己肯定感、自己有用感を高めることができる指導を引き続き行っていく必要がある。



質問小中 32（授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいましたか）と
質問小中 5（自分には、よいところがあると思いますか）のクロス集計

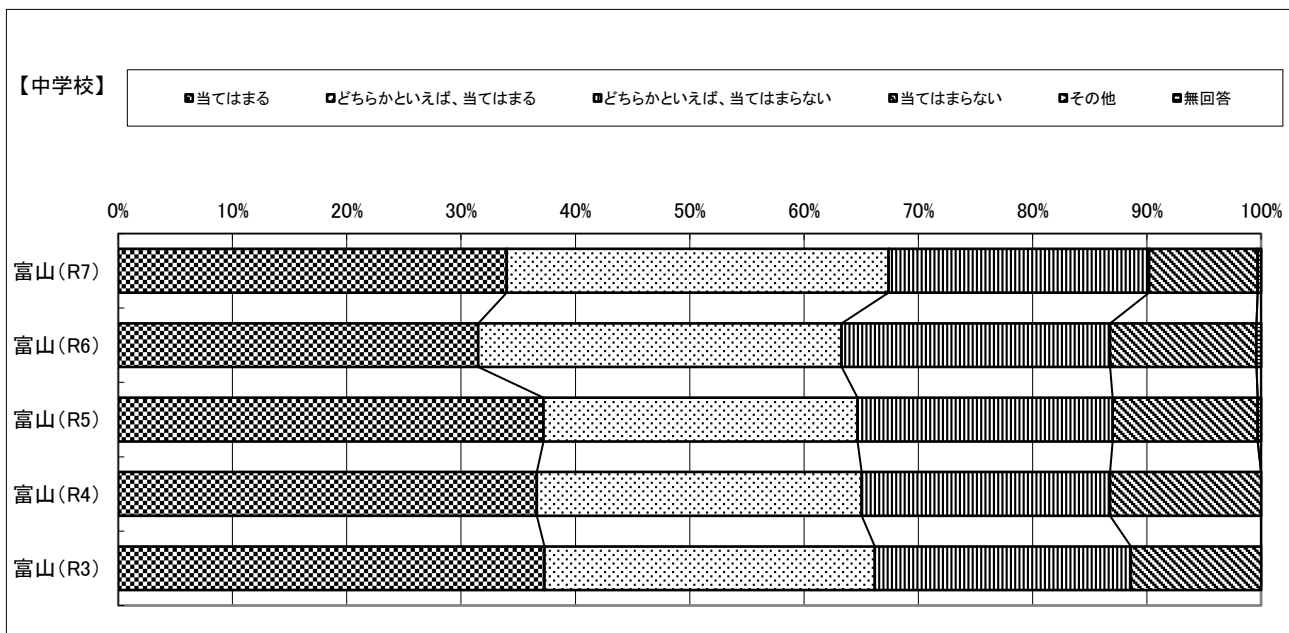
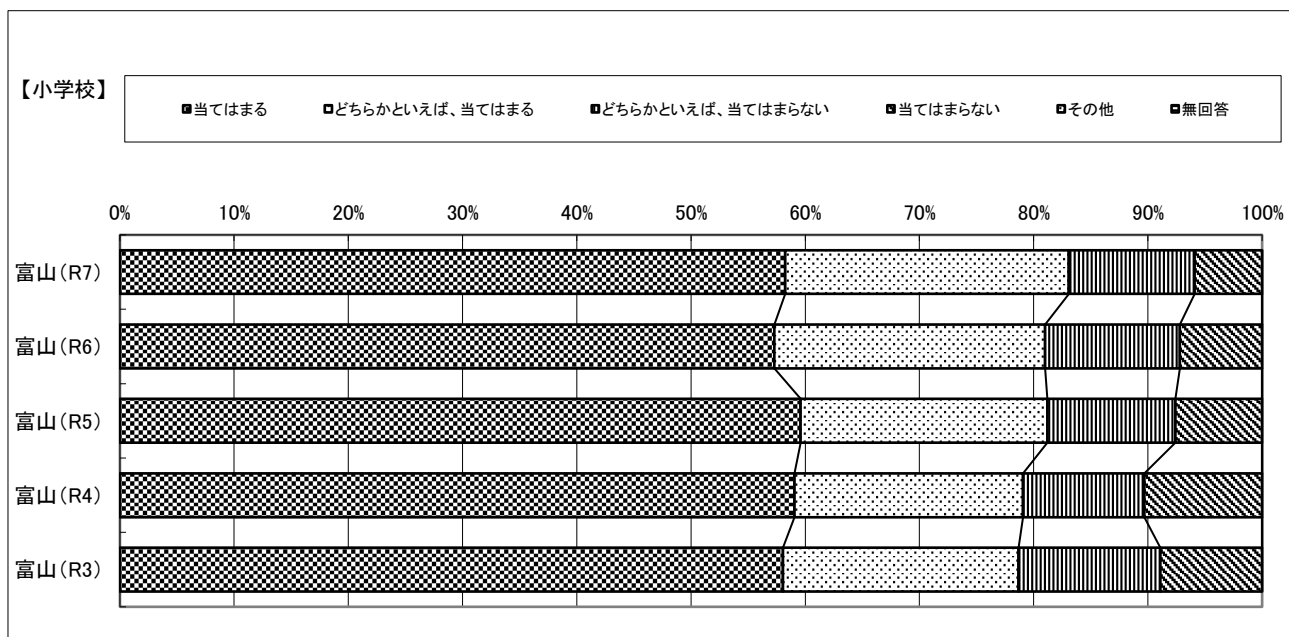


(2) 将来の夢や目標を持っていますか（質問小中7）

・「当てはまる」「どちらかといえば、当てはまる」と回答した児童生徒の割合は、過去5年間、小学校ではやや増加している。中学校では減少傾向にあったが、本年度は増加に転じた。

○各学校で、総合的な学習の時間における職業調べや地域で働く人の講演会、企業見学の実施や「社会に学ぶ『14歳の挑戦』」（中学校のみ）による体験活動等を生かし、自分の将来像について考える機会が充実しているのではないかと考えられる。

◎児童生徒が自分の役割を果たしながら、自分らしい生き方を実現するための力、自らの可能性を発揮し未来を切り拓いていく力を育むためには、発達の段階に応じた取組を進めていくことが大切である。今後も引き続き地域の協力を得ながら職業体験の機会を充実することや、生き方を選び取るプロセスを学ぶキャリア教育の視点を取り入れることも必要である。



(3) 普段の生活の中で、幸せな気持ちになることはどれくらいありますか（質問小中 15）

・「よくある」「ときどきある」と回答した児童生徒の割合は約9割である。過去3年間、小・中学校とも増加傾向にある。

○質問（小中11）「人の役に立つ人間になりたいか」、（小中14）「友達関係に満足しているか」の割合も同様に微増している。他者とのよい関わりも幸せを感じる要因になっているのではないかと考えられる。

◎児童生徒が多様な他者と協働することの楽しさや成就感を味わい、自分らしさを発揮できるようにするためには、協働的な学びの中で、多様な他者との関わりが自分のよりよい生活を構築するために必要であることを味わうなど、ウェルビーイングの向上を目指していくことが大切である。

